

あらゆるものが神（カムイ）であるアイヌ世界では、もちろん蛇も神様です。蛇は元々天上界に住んでいましたが、創造神の代理として



蛇の神様—夏には言わないもの

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

地上を治めていた火の女神を慕い、稲光に乗って地上に降りてきたそうです。地面に穴が空いていれば、それは蛇が地上に降りたときに空いた穴であり、地獄に通じているので近づいてはいけないといわれています。アイヌの人々は、地下に大きな蛇社会があり、人間と同じ姿をして狩りをしたり畑を作ったりして暮らし、地上に出てくるときだけ、蛇の姿になるのだと考えていました。この神様は喧嘩好きで、悪さを仕掛けることも多いので、アイヌの人々は警戒しつつも敬意を払っていたのでした。蛇の抜け殻は、有難い授かりもの、カムイサランペ（kamuy-神の saranpe-絹衣）として、特に女性のお守りにされ、穀物蔵で見つかれば豊作の印だと喜ばれました。また、その年の抜け殻は、イボ取りに特に効果があるとして重宝されました。古いものはイボ取りの効き目はなくなりますが、護符としてはご利益があるとして、バラバラになるまで大切に隠し持っていました。イボはエルムンタマ（erumun-ねずみ tama-玉）ですが、蛇はネズミを食べるので、イボをネズミに例えて食べてもらうということでしょうか。面白いネーミングだと思います。日本でも各地で、蛇の抜け殻をイボ取りに使っていたようなので、実際、蛇の抜け殻には何かイボを消す成分が含まれているのかもしれませんが。

北海道で最も一般的な蛇は青大将です。アイヌ語では、キナシュトゥンカムイ（kina-草 shut-根元 un-に住まう kamuy-神）、またはタンネカムイ（tanne-長い kamuy-神）、サクソモアイエパ（sak-夏には somo-ない a-人が ye-言わ p-もの）などと呼ばれます。最初の2つはわかりますが、「夏には言わない」とはどういうことでしょうか。変温動物である爬虫類は冬はあまり動きませんが、地温があがるにつれて活

発になります。そこで夏の暑い盛りには動きも俊敏になるので、へらず口などを叩くと早速に罰が当たるから、蛇の悪口などは口にできないという意味です。

アイヌの人々は食材を求めて歩き回るとき、とっさに蛇を殺したり、草叢に潜む蛇の蛇気に当たった結果、体調が悪くなることがありました。このような場合、クルミの木で御幣（イナウ）を作り、蛇に謝罪、場合によっては鎮魂すると治るということが実際にあるそうです。人間の思いやりある祈りの言葉により、生き物は再生することができるという考えです。生き物のほうでも、人間の丁寧な扱いに感謝して良運を授け、場合によっては永代の守護神ともなります。それは、ウィンウィンの関係であり、人間のほうが他の生き物よりも優位にあるという考えからは出てこない発想であると思います。

ところで、イナウは主として柳、ミズキ、キハダの枝などから作られるのに対し、クルミのイナウが捧げられるのは蛇だけです。これは、クルミの若い枝を縦に割ると芯が中空になっていて、そこに細かな仕切りがあり、一見蛇腹状になっているからではないかとのこと。

例外的に、見つけたら迷わず殺さなければならない恐ろしい蛇はジムグリ、アイヌ語ではフレカムイ（hure-赤い kamuy-神）です。この蛇は毒もありますが、見ただけでも人の命を奪うと言われていました。奇妙なことに、この蛇は自らドリルのように回転して穴を掘り、その中に入ってしまう。ある時、家の土間でこの蛇を見たお婆さんは気を失ってしまいました。そこへ帰ってきた夫がすぐさま穴を掘り起こし、蛇を引っ張り出して殺し、さらに魔除けのヨモギの枝を蛇の頭に刺したところ、幸いなことに、お婆さんの命は助かったそうです。皆さんも、ジムグリにはくれぐれも気をつけましょう。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのどはん』（監修、デーリィマン社、2019年）、『平成20～令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～13』（北海道教育委員会、2008～2022年）等。